

# としょぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 90 号

平成23年1月14日発行  
米子工業高等専門学校  
図書館情報センター



閲覧室風景

## 目 次

### 平成 22 年（第 37 回）校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

読書・エッセイコンクール雑感 .....2

#### 〈読書感想文の部〉

最優秀賞	電子制御工学科	1年	冬 樹	メロス本当に勇者か .....3
優 秀 賞	物質工学科	1年	トクメイキボウ	『乱反射』を読んで .....4
佳 作	機械工学科	1年	平田 光樹	『五体不満足』を読んで .....5
佳 作	物質工学科	1年	七瀬 浩希	人間 .....5
佳 作	建築学科	1年	カメルーン	『この世で一番大事な「カネ」の話』 .....6
佳 作	建築学科	1年	み の	『食堂かたつむり』を読んで .....7

#### 〈エッセイの部〉

最優秀賞	物質工学科	1年	ごんちゃん	おばあちゃん .....8
優 秀 賞	機械工学科	1年	た け し	あの日の出来事 .....9
優 秀 賞	建築学科	1年	がっほい2号	運命の出会い .....10
佳 作	電子制御工学科	1年	ゆ う き	いつまでも大切にしたいもの .....11
佳 作	建築学科	1年	ハンサム	私がいま若者として訴えたいこと .....12

平成22年度(第37回)

# 校内読書・エッセイコンクール優秀作品

## 読書・エッセイコンクール雑感

国語科 永井 猛

今回の応募総数は192編、うち119編が読書感想文、73編がエッセイであった。

今年の読書感想文には、本を読んで自分ならどうするのか、どう感じたのかをしっかりと書き留めているものが多く、たくましく感じた。そんな中で最優秀賞に輝いたのは「メロス本当に勇者か」である。太宰治の「走れメロス」の感想文だが、タイトルにある通り、なかなか挑戦的だ。文体も歯切れがよく、スピード感がある。メロスの、最初は友の命をかけているのに歌を歌ってぶらぶら歩き、その後、時間がないと泣く、この矛盾した動作を勇者らしからぬと指摘する。実は、こうした矛盾した行動は太宰作品の登場人物に往々に見られる特徴的なものだ。それを端的に指摘した点は見事だ。そして、自分の身の回りを眺めて「真の勇者」とはどういう人を言うのかと考えていく。読書を通して自分を、周りを見つめ直していく、これこそが読書感想文の意義あるところだろう。

優秀賞の『乱反射』を読んで、原作の突きつける人間の醜さや愚かさを通して、自分ならどうするのかを綴っている。佳作の「人間」は、伊坂孝太郎の『魔王』を読んで、何気ない日常に流される危険性を感じ、「生きること」の意義を見つめ直すという、これもまた読書の醍醐味を伝えてくれる感想文だった。

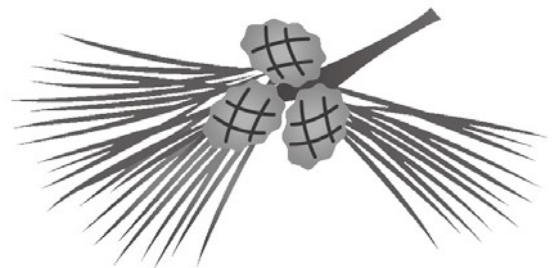
佳作『食堂かたつむり』を読んで、喪失感の淵に沈み、声を失った主人公が食べ物によって声を取り戻していく姿を通して、自分の生活を振り返る。『五体不満足』を読んで、乙武さんの生き方を作り上げたのは何だったのかを探っていく。『この世で一番大事な「カネ」の話』は、西原理恵子の自伝のエッセイだが、「普通の人間であり続けるために、働いてお金を稼ぐ」という強烈なメッセージに圧倒されながら、これも自分の生き方を考えている。

エッセイの部も、しっかりと自分の身の回りを見つめている作品が多かった。

最優秀賞「おばあちゃん」は、遠い出来事と思っている死が突然やってくる、その信じられない思いを迷いのまま書き留めていて共感を呼ぶ。

優秀賞「あの日の出来事」は、バイクが便利な乗り物から凶器へ変貌する、その様子を的確に描写し、誰にでも起こり得る恐怖をリアルに伝える。優秀賞「運命の出会い」は、愛猫との運命的な出会いを綴り、ほのぼのとした思いに誘う。佳作「いつまでも大切にしたいもの」からは、一番好きな空を、いつまでも美しいままで眺めていたいという思いが伝わってくる。佳作「私がいま若者として訴えたいこと」は、現在の若者のマイナス面として指摘されることにも種々の理由があり、そういうことへの配慮を訴えている。

自分の思いを言葉にするのは至難の技だが、入賞作品を参考にして自分なりの表現方法をつかんでいてほしいと思う。



## 読書感想文の部

## 最優秀賞

## メロスは本当に勇者か

電子制御工学科 1年 冬 樹

メロスは、走った。友のため、暴君の手から町を救うためである。そして、走りに走った後、友と町を救った。メロスは勇者だ。

『走れメロス』を読んで、私は一つ疑問を持った。メロスは本当に勇者であるのか、という疑問である。確かにメロスは友の命を助け、邪知暴虐の王を改心させた。だが、メロスの行動には、真の勇者と呼んで良いのか分からないようなものがあると思える。自分から三日の刻限を決め、友の命をかけているのに、まだ時間があるから、と歌を歌いながらぶらぶら歩いている行為。それなのに彼はその後、泣きながら、「時は刻々に過ぎていきます」と発言する。これは勇者にあっていい行動だろうか。メロスは本文中、自身のことを「真の勇者」と言う箇所がある。メロスは何故、自分のことを真の勇者と言ったのだろうか。

そもそも、「真の勇者」とは何なのだろうか。何かを成しとげるのが勇者だろうか。名誉を得るのが勇者だろうか。私は、そのどちらでも無いように思う。私は、「この人こそが勇者だ」と思える人に出会ったことがある。

中学の時だった。私のクラスには、授業の態度が良くない生徒がいた。ある時の授業時間、その人が喧嘩を始めてしまった。その喧嘩は大きくなっていったが、美術の時間で個人の作業だったため、私を含めクラスメート達は、少し離れた所で作業を続けていた。「迷惑だ」とは思ったが、巻き込まれるのが嫌だったので、私は何も無かったこととして作業を続けた。少し時間が経っても、喧嘩は終わらなかった。それどころか、先生をも巻きこんだものへ発展し、激しくなっていた。何人かの人は、小声で口々に

「本当にやめてほしい。迷惑だからどこか別の所でやれば良いのに。周りのことも考えてほしい。」

とつぶやき始めた。私はそのつぶやきに対して「全く同感だ」と思いながらも口には出さず、重い空気

の中作業を続けた。その時だった。一人の友人が、「もうやめて!」

と言いながら立ち上がった。教室は一瞬静かになったが、すぐに

「関係無い奴は黙っとけ!」

という怒鳴り声が響いた。それでも彼女は、凛とした声で、

「いいえ、黙りません!」

と言った。その後、喧嘩をしていた生徒は教室を飛びだして行ってしまい、かえって大事になってしまった。しかし彼女は少しでも状況を改善しようと一生懸命に努力をしていた。

私はその時、彼女がとても格好良く見えた。メロスのように、結果を出して状況を改善した訳ではないが、自分の正しいと思ったことに行動を起こし、そのためにひたすら頑張る姿は、勇者のように見えた。一と言える、彼女の勇気に感動した。

この事から私は、勇者というのは正しいと思ったことに一歩を踏み出す勇気を持ち、努力することの出来る人なのではないかと思った。

メロスは歌いながら歩いた。しかし、メロスは努力した。荒れくるう波を泳ぎ、山賊に勝利した。自身を「真の勇者」と言ったのは、今にも折れそうな心を保つための理想像だったのではないだろうか。途中で挫折しそうになるが、友のため、正義のためにメロスは走る。大きな一歩を踏み出して、勇気を持って走ったメロスは勇者だ。勇者は走り、結果の後に英雄になった。

私は自分に勇気が足りないと思う。友人のように、「それが正しい」と言える勇気が欲しい。英雄にはななくていい。まずは一歩進める、小さな勇者になりたい。



## 優秀賞

## 『乱反射』を読んで

物質工学科1年 トクメイキボウ

ある風の強い日、一本の街路樹が倒れたことによって幼い男の子が死にました。本作はこの事実を主軸として、残された幼児の父親や街路樹が倒れるという事故の原因を作った七人の人物の視点をもとに描かれています。

年齢も職業も全く関係のない七人の人物の行為が男の子を殺しました。しかし、これは結果としてそうなってしまったということです。七人の人物の行為を別々に見てみると、「罪」などと呼ばれるほどのことを彼らはやっていません。彼らはどこにでもいる普通の人々です。この小説は、そんな彼らが被害者の父親に糾弾されたときに見せる人間の本质や醜さに焦点をあて、それをリアルに表現しています。そして、それがこの小説における最大の魅力ではないかと私は思います。

ある都市に、幸せな三人家族がいました。夫婦間の仲は良く、子供はかわいい盛りで、嫁姑間に多少の問題はあるものの比較的平和に暮らしていました。そんなある日、母親がベビーカーをおして家路を急いでいると、不意に街路樹が倒れてきて、子供が座っているベビーカーがその下敷きになってしまいます。母親は半狂乱になって息子の名を呼び続け、その周辺は大きな人だかりになりました。

救急車がやっと来ました。しかし、そこからが問題でした。事故がおこった現場のすぐ近くに建っている病院が受け入れを拒否したからです。その理由は二つありました。一つは夜であるにも関わらず、風邪などの軽い病気の人たちで病院がいっぱいであつたこと、そしてもう一つは、そのとき病院にいたアルバイト医が外科医を呼ぶことをためらい、受け入れを拒んだためでした。つまり、このとき幼児をこの病院が受け入れていたとしたら、もしかすると幼児は助かったかも知れません。そう考えた場合、受け入れを拒んだアルバイト医と病院が混む原因を作った大学生の青年が幼児を殺したとも考えられなくはないわけです。けれども、彼らの行為は幼児の死に直接関係があるとは言い難い小さな問題です。他にも、違う病院へ向かおうとする救急車が渋滞に巻き込まれたり、そもそも街路樹の検査を怠った業

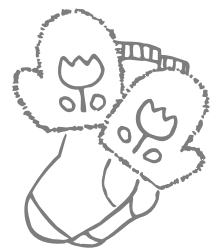
者、また、街路樹の検査の邪魔をして木の伐採反対運動を行っていた女性、街路樹の検査が出来ない原因を作った老人、道路問題から目をそむけていた役人など本当にささいな行為が重なりあって、この事故はおこったのです。

しかし、納得のいかない幼児の父親はこの七人の人物を一人ずつ訪ねて歩き、自分たちのした行為について問いただします。すると、皆そろって、「子供が死んだのは可哀相だと思う。ですが、私は何も悪くない。」

といった主旨の言葉を父親に向かって投げつけます。この言葉にはどういった意味が込められているのでしょうか。私はこの言葉に憤りを覚えます。彼らの行為が直接幼児の死につながっているとは思われません。しかし、彼らがその一端に参与しているということは否定出来ません。そんな彼らに、自分は悪くないなどと断言することが出来るのでしょうか。彼らは心の底で多少の罪悪感を感じていました。けれども、多少の罪悪感とはときとして大きな自信になるのではないかと私は思っています。全く罪悪感がない場合、人間はしばしば罪悪感を感じない自分自身に不安になります。罪悪感が「多少」であるからこそ、人間は自分でそれを強く否定することによって、自分は悪くないという意思を強固なものにし、自信につなげるのです。

この小説においての「罪」とは、誰もがやっている行為です。ですが、「罪」には違いありません。ならば、認めなければなりません。そんなつもりではなかった、そんなことまで考えていられない、などといった言葉は言い訳に過ぎないと私は思います。どんな小さな「罪」であろうとも、それを認め、謝罪することが出来る人間こそ、本当に立派な人間であるのだとこの小説を読んで感じました。

自分の行動に責任を持ち、自分のやるべきことにもしっかりと自信と最後まで諦めない心を持って取り組みたいということをこの小説を読んで改めて強く思いました。



## 佳作

## 『五体不満足』を読んで

機械工学科1年 平田 光樹

「障害は不便である。しかし不幸ではない。」ヘレン・ケラーがつづったこの言葉の意味を「五体不満足」を通して理解することができました。この本を書いた乙武さんの生き方は不幸を感じない生き方でした。また乙武さんを支えてきた両親、友達、先生にもとても感動させられました。中でも、特に考えさせられるものや心にひびくものがありました。

一つは「手伝ってはダメ。」乙武さんの小学校四年生までの担任であった高木先生の言葉です。手も足もない乙武さんにはとても厳しい言葉のように感じます。しかし乙武さんの将来を考えると、とてもすばらしい言葉です。「ほっておけば誰かがしてくれる」という甘えた気持ちが育ってしまうと思い発言した、とても思いやりのあるこの言葉に、先生の良い判断力を感じました。

二つ目は「障害を言い訳にしない」という乙武さんの言葉です。ほくがもし障害者だったなら、失敗する度に「この障害のせいで」と言うと思います。しかし乙武さんの考えは、「どうせ自分は…」とネガティブに思うのではなく、「おれはあいつよりこんなことがすごいよ。」とポジティブにとらえることで失敗をのりこえていくというものです。ほくはこの考え方を利用してこれから先、困難にのりこえていこうと感じました。

三つ目は「障害者ももっとおしゃれをしてほしい」という乙武さんのうったえです。乙武さんははじめて外国人の障害者をみたとき、「かっこいい」と思ったそうです。ほくたちのように障害をもたずに生まれた人は、障害者をみたとき、きっと「かわいそう」と思ってしまいます。しかしおしゃれをした障害者とそうでない障害者をみたとき、だいたいのおしゃれをしてない障害者の方が「かわいそう」と感じると思います。二つ目で話した「障害を言い訳にしたくない」とつながるところもあり、また服装で「かわいそう」という人の気持ちを少しでもなくそうという乙武さんの強いうったえに「自分のことだけでなく、他の障害者も助けよう」という思いが伝わってきました。

最後は乙武さんが言った「障害をもっていても、ボクは毎日が楽しいよ。」という言葉です。多くの人は「障害をもっている人は、人生がつまらないのではないか」と思ってしまいます。しかし、「五体が満足だろうと不満足であろうと、幸せな人生を送るには関係ない。」という乙武さんの考えでほくは「その通りだなあ」と感心しました。またこの言葉をきいて、障害者たちにそう思ってもらえるよう、ほくたちのような障害のない人たちが行動にうつさないといけないと思いました。「かわいそう」という気持ちをもたない。困っていると思ったら助けてあげる。最初はこのようなことを行動にうつすのは勇気がいります。しかし一人ひとりがその勇気を出すことで障害者の人たちも「毎日が楽しい」と感じることができます。乙武さんも今、「自分にしかできないこと」=「心のバリアフリー」に少しでも貢献できるようにとがんばっておられます。ほくも乙武さんに負けないうらい「心のバリアフリー」に貢献していきたいです。

## 佳作

## 「人間」

物質工学科1年 七瀬 浩希

僕は朝起きて、支度をして学校へ登校し、帰宅した後に夕食を食べ、風呂へ入り、寝るという生活を毎日送っています。そんな生活の仲で伊坂幸太郎さんの『魔王』に出会って僕の世界観が変わりました。

僕が毎日送っている生活は社会の中でのものです。その社会は指導者によって良い方向へ導かれ、又は悪い方向へと導かれます。しかし、自分自身はあまり社会の変化を感じません。僕の中から見た世界は、いたって普通です。

この『魔王』は、ある日主人公が自分の不思議な能力に気付いて、カリスマ政治家の犬養に抗うという話です。第二部の「呼吸」では、亡くなった主人公の弟が主人公の遺志を継いでいきます。

この小説では選挙や憲法改正、自衛隊などの言葉が出てきます。しかし、それらのことはこの作品のテーマではないと思います。

この小説を読んでいると「考えろ、考えろ。」というキーワードが強調されています。このキーワー

ドは主人公が世間への違和感を感じた時に発せられているものです。この違和感を主人公だけが感じています。この小説の世界では、大衆は変化を望み、強いリーダーを求めています。その状況の中でカリスマ政治家の犬養が大衆を煽動し、日本を変えようとしています。政治家が発する言葉の表面だけを読み取り、周りに流されていきます。そしてひとつの集団ができています。やはり、僕でも集団の中になると安心してしまいます。そして、その集団の中にあるせいで一部盲目になってしまうところもあります。「周りの人もそうするから」というように、自分で考えて行動することを忘れてしまうからです。この主人公は周りに流されて盲目になっている人たちを見て違和感を感じています。そして「でたらめでもいいから、自分の考えを信じて、対決していけば」という信念を貫き、自分の持てる力を使って立ち向かっていきます。

強烈な個性と影響力を持った指導者に何も考えずに付いて行ってしまうこと、指導者に悪気はないけれど、大衆の行動が不幸を招くこと。これは今の日本にも当てはまる場所があるのではないのでしょうか。

この小説では、何気ない日常に流されることの危険さの他に、「生きること」を考えさせられました。

「生きること」は、この小説の全体としてのテーマの中に入っているとはいえませんが、僕は小説内のひとつの言葉が気にかかりました。「ただ、生きている。」「自分の人生とはなんなのか」、「生きていることはどういうことなのか」という究極的な疑問が頭に浮かんでくるような深い言葉でした。

僕は、『魔王』を読むまで「自分は生きているのだ」ということをあまり意識していませんでした。自分の中で「生きる」ということが当たり前になっていたからです。僕以外にもこのような人はいくらでもいるでしょう。

自分は今、将来のために勉強をしています。その勉強は、将来仕事についてお金を稼ぐためだと考えていました。しかし、それは、ただ、生きているだけではないのかと思うようになりました。そう思うようになった僕は今、丁度米子工業高等専門学校に学生として通っています。丁度と言うのは少しおかしいかもしれませんが、僕としてはそう言えるのです。

僕が入学した物質工学科は、化学を基盤として物質について教育、研究、開発を行う学問の分野です。

新たなものを作り出すということは、とても難しいことです。それが、環境が変わりつつある地球の中でのことであり、そのことを想定していかなければならないので尚更です。しかし、そんな難しいことこそ成し遂げた時、自分が「ただ、生きている」だけでなく、自分が生きていると同時に、他の人の役に立っているということが、僕にとってはとても素晴らしいことだと思うのです。

この小説は、僕に様々な良い影響を与えてくれました。自分の将来の理想の姿のようなものを改めて確認することができ、その理想に近づくために努力し続けることのモチベーションにもなっています。

数ある小説の中で、この作品を読み、感じたことを自分の人生の経験値として大切にしていきたいです。

## 佳作

### 『この世で一番大事な「カネ」の話』

建築学科1年 カメルーン

私はこの本を読んでる言葉がとても印象に残りました。なぜなら、まだ社会に出て働くということは、経験してないけど普通の学校生活や寮生活でもいえるような気がしたのです。

ある言葉とは、「どんな時でも、働くこと働き続けることが『希望』になる」という言葉です。初めはどういう意味か全くわかりませんでした。なので、私自身の立場に置き換えて考える事にしました。もし、私の学ぶ場所がない、学校へ行くことができないということで考えてみました。それは、私の心と体に大きなダメージを与えるかもしれないし、夢や希望を奪い取られるかもしれないと思いました。そうしてみると、私の生活の中心は家がほとんどです。家族以外の人とコミュニケーションはとれないし、仲間意識や、思いやり、団体行動というのを知らない人間になってしまいます。果たして、こういう人間を人間と言えるのでしょうか。私は、言えないと思います。

自分が普通の人間であり続けるためにも、働いてお金を稼ぐというサイクルの中に身を置いておかないと自分ではなくなってしまうと思いました。でも、私は今の生活で自分が自分でなくなっていると思っ

てしまいます。毎日を寝て過ごし、家を出て人に会うことも少ないです。それに、寮の生活では言われるがままに動いています。自分を振り返った時にこのままではいけないということに気付きました。

この本に「自分の人生に満足しているかどうか」という問いかけがありました。私は、迷わずに満足していないと答えます。でも時々、満足していると感じる事があります。なぜそう感じているのか考えてみると、自分が誰かに必要とされていたり、感謝してもらえたり、自分の頑張りや努力が目に見えて表れた時です。でも、その時々満足と感じられる事が、自分の人生に満足しているということなのかもしれません。ただ、満足した人生を送るすべとして、この本の作者西原理恵子さんの「絵を描いて食べていくこと」のように大切な目標、譲れない目標をしっかりと持つということです。

最後に、高専に入学してから初めて一冊の本を読み終えるということをしました。そして、この本は私にとってとても難しかったです。働いたこともないし、お金のこととか全部親にしてもらっています。でも、今のタイミングで読んだことにより自分自身を振り返ることができたし、親への感謝の気持ちも生まれました。

私の人生は十五年と少しとまだ始まったばかりです。なので、せめて今ある社会・学校や寮の中でどう立ち回れるか、どう立ち回りたいかをしっかりと考えていきたいと思います。そして、将来どうしたいのかなど具体的に決めていき、それを私の譲れない目標として日々の生活を送りたいと思いました。



## 佳作

### 『食堂かたつむり』を読んで

建築学科 1年 み の

「ありがとう」

私は倫子が放ったその言葉に、なぜかどきりとした。

主人公の倫子は、自由奔放な母親にどうしても馴れず、都会に出て一人暮らしを始める。そこでインド人の恋人と出会い共に暮らし始めるが、ある日倫子が家に帰ると、家財と共に恋人は消えてしまっていた。恋と同時にあまりにも多くのものを失った倫子は、衝撃で声をも失ってしまう。仕方なく倫子は実家に帰り、そこの物置小屋で、得技を生かし、食堂を営むことを決意する・・・。

およそこのような話だが、倫子の行動力には少し驚いた。しかし、この行動力は、自分の大切なものを見つけないと強く想う気持ちからのものだと私は考える。

倫子は冒頭から恋人に逃げられ、深い悲しみを感ずるが、母のペットである豚のエルメスの世話をするため働くことを決める。このことから、倫子はとても心が強いことが分かる。しかし、それは裏を返せば強情ということにもある。強情な生活の倫子は、たびたび母の愛人であるネオコンに冷たい態度をとってしまう。私は、この倫子の性格に、とても親近感がわく。私も、好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、とはっきりしていなければ気が済まない、子供っぽい所があるからだ。

そんな少し子供っぽい性格だが頑張り屋の倫子は、「かたつむり食堂」を通じて、様々な人間と出会う。人の善意や悪意にふれながら、倫子は人間として成長していく。

ある日倫子は、近所に住む「熊さん」から、彼の奥さんの手料理を貰う。倫子はこれを食べ、亡くなった祖母の作ってくれた手料理を思い出す。そこで、奥さんの手料理と祖母の手料理には、同じ魂が込められていると感じ、感動する。最初にこの本を読んだときは、よくその感覚が理解できなかった。しかし、よく考えてみると、私は以前、その感覚を体験していることに気が付いた。

私は祖母の家に行くと、決まって夕飯をごちそうになって帰る。祖母の手料理の味つけは、甘口で、辛口が好きな私の口には本来合わないはずだが、と

でも美味しいと感じる。これは、祖母が、久しぶりに遊びに来る私に対して、喜んでほしいという想いや、愛情を込めて作っているからだとは感じた。そのような、普段忘れがちな想いを、倫子は改めて感じたから感動したのだと思う。

しかし、倫子がずっと馴れなかつた母が病気だということが分かる。そして最後の願いとして、母がずっと想いつづけていた相手と結婚式を挙げ、ほんの数日後に亡くなってしまふ。傷心した倫子は食欲を失い、大好きな料理もせず、インスタント食品ばかり食べて過ごすようになる。そんなある日、家の外で、死んだばかりの鳩を見つける。倫子は鳩を土に埋めようとするが、「死をむだにしてはいけない」という母の声が聞こえたような気がして、鳩を調理して食べることにする。そして、鳩を食べた倫子は、声を取り戻し、鳩や材料に対して「ありがとう」と言う。私は、この倫子の言葉がとても印象に残った。倫子はこの言葉を、鳩や材料だけでなく、死んだ祖母や母、客などすべての人々に対しての言葉だと思う。倫子は、母の声によって、感謝の気持ちを思い出したと私は考える。この言葉を聞いて、私は、日々の生活態度について考えた。私が毎日食べているご飯には、動物の体が使われているし、そのご飯は、母が魂を込めて作ってくれている。私が今踏んでいる床も、誰かの手によって作られたものだ。そう考えると、世の中の全ての物には、愛情や魂などの気持ちが込められているのだと思う。この本を通して、どんな小さなものにも気持ちがこもっていることを学んだ。私はよく物をそまつに扱ったり、人にやつ当たりしたりするが、これからは何に対しても感謝の気持ちを忘れず生きていこうと思った。



## エッセイの部

### 最優秀賞

#### おばあちゃん

物質工学科 1年 ごんちゃん

人はいつか必ず死んでしまふ。そんなことはもちろん分かっていた。でもそれを身近に感じたことはなかつた。

ある日、母からおばあちゃんが入院したと聞いた。もちろん心配にはなつたが、元々体が弱く何度か入院したこともあつたので、すぐに退院するだろうと思つていた。私は部活と友達との約束を理由にすぐにお見舞いには行かなかつた。

二日後、私は友達の家に行った。父から電話がかかつてきた。おばあちゃんの容態が悪くなつたから来てほしいとのことだつた。私は容態が悪くなつたと聞いてもまだ大丈夫だろうと思つていた。病院に向かう車の中で今の状況を聞いた。相当悪いということだつたが、私はなぜか絶対におばあちゃんはよくなるとそう思つていた。

病室に入った。おじいちゃんが泣きながらおばあちゃんを見ていた。私はおばあちゃんに駆け寄つて声をかけようとした。でもそこには私の知つているおばあちゃんはいなかつた。たくさん薬をいれたため膨れてしまつた顔、目はうっすらとあいているがどこを向いているか分からない。私が声をかけると必死に体を動かして応えてくれた。しばらく病室にいたが私は何もすることができなかつた。目の前にいるこの人が本当に自分のおばあちゃんと信じていることが出来なかつた。先生に呼ばれて説明を受けた。病名は難しくて分からなかつたが色々な所に転移してどんどん悪くなつている、あとは本人の体力次第と言われた。ずっと病院にいるわけにもいかず、その日は一旦家に帰つた。

次の日、私は部活に行った。今考えるとなぜ部活に行ったのか分からない。でも今日は大丈夫と勝手に確信していただかつたのかもしれない。部活で携帯をふと見たら着信が三件。父、母、兄からだつた。なぜかマナーモードになつていて気づかなかつた。その後、かけ直して兄と急いで病院に向かつた。病室に入ると大阪から父の兄の家族も来ていた。私はすぐおば



あちゃんに声をかけた。そのあとすぐに心肺停止になった。今思えばおばあちゃんは私たちが来るのを待っていていたのかもしれない。先生が来ておばあちゃんを診た。私はひたすら祈るしかなかった。でも先生はゆっくりと時計を見て残念ながらと言った。何が起きたか理解できなかった。その場にいるみんなが泣いていた。私も泣いた。おばあちゃんは助かると根拠のない自信があったため信じたくなくて泣くことしかできなかった。私の大好きなおばあちゃんは死んでしまった。その事実が私に重くのしかかった。

私はなぜすぐにお見舞いに行かなかったのか、なぜおばあちゃんが厳しい状態のときに部活行ったのかなどたくさん後悔をした。おばあちゃんの事は本当に大好きだったのに。何度も自分を責めた。今もう一度おばあちゃんに会えたらと何度も思った。

人はいつか必ず死ぬ。誰もが分かっていることだと思う。でもそれを身近に感じる事が出来る人はどれだけいるだろうか。私は「死」に対して軽く考えすぎていたのかもしれない。身近な人がなくなるというのはこんなにも辛いものだとは思っていなかった。もしかしたら自分の大切な人が明日急に死んでしまうかもしれない。その人との明日は必ずあるとは限らない。私はそのことを身をもって感じる事が出来た。家族、友達、先輩など当たり前にいる存在も明日には当たり前ではないかもしれない。私は後悔しないよう伝えたいことがあるときはその時に、そしてみんながいることは普通ではなく素晴らしいことだということをおばあちゃんに教わった。そして私はおばあちゃんの生きたかったであろう今を後悔のないよう精一杯生きていく。



## 優 秀 賞

### あの日の出来事

機械工学科 1年 たけし

自分は凶器を操っている。そんな事分かっていると目をそらしていた。今までは…。

八月某日、運転免許センターにいた。原付免許を取得するためだ。学科試験終了後、電光掲示板に合格者の受験番号が映し出された。鼓動が耳元で鳴っているようだった。

免許証が交付される際、職員はこう言った。「道路は皆のもの。車も二輪も同じ。」だと。

僕のちっこいバイクと、初の出会いを果たしたのは、それから間もなくのこと。

自転車よりも小さなそのバイクは、妙に愛くるしくて、パワフルで、一目惚れだった。

しかし、安くはない。ただ頭の中を駆け巡るだけだった。

数日後、バイク屋のトラックが家に来た。荷台を見るなり、目を輝かせてしまった。

クラッチとギアがついている、このバイク。乗れるまで容易ではなかった。

バイク屋さんは帰り際、早口でこう言った。「原付も、責任感持って運転するんだよ。」

猛暑のニュースは、めっきり見なくなった。朝は肌寒ささえ感じ始める頃だった。

慣れたバイクで、市街地の風を切っていた。

もう昼になる時間帯だった。比較的静かな道に出た。前方は国道との交差点だ。

信号でいつも通り停車した。もちろんこの後に起こる事など知るよしもない。

シグナルが変わった。アクセルを回したのだが、プツン、とエンジンが切れてしまった。

クラッチを開けるタイミングが合わなかった為だ。よくある事だが、イラッとするのだ。

もう一度エンジンをかけて、ギアを入れた。

ここから先は、思い出したくもない。

前輪が異常に浮くのを感じた。飛び降りたのもつ

かの間、バック転のように一回転した。

まるで闘牛と化した。何度もハンドルを握ってみるも、アクセルをひねってしまい、暴れるばかりだ。歩道に放って、もう全力で地面に倒すので精一杯だった。

理解できなかった。安全装置でエンジンが切れても、何が起こったのか分からなかった。

ほんの数秒の出来事だったからか、恐怖も何も感じなかった。

横断歩道を押して歩いて、安全な所にバイクを止めた時、始めて怖くなった。

同時に様々な事が脳裏をよぎる。

もしも、前に車がいたら？

歩行者が信号待ちをしていたら？

バイクから降りられなかったら？

衝撃でガソリンが漏れてしまったら…？

聞けば、バイクが極端に小さいので、急発進すると、前輪が浮くのだそう。

もちろん急発進などするつもりはなかった。

今回は運転ミスで済んだが、ヘタすれば、大事故につながりかねなかった。

あれから、免許を取らなければ良かったと、何度思ったことか。即エンジンを切らず、歩道にバイクを放ったのは、非常に危険だ。

誰もいなかったから良かった、そんな事など通用するはずがない。自分はケガしても、他の車や歩行者に当たったらと思うと、胸が痛い。赤信号を見る度、吐き気がする事もしばしばある。

人間が人間の為に創ったもの。バイクも車も、とても便利だ。

同時に、それは、人の命を奪ってしまう。凶器になることもある。ただ誰も、普通は恐れる事はない。事故なんてしないと思っているから。当然だ。恐れなければ、街など歩けないし、運転もできない。

ただ一つ、運転者は、自分の命も、他人の命も授かっている事を心の隅に置いておくべきなのだ。あの日の出来事や、交通事故の記事を見たりした時、つくづく思う。

## 優秀賞

### 運命の出会い

建築学科1年 がっぽい2号

小さい頃から猫が大好きで、猫がいる生活に憧れ、ずっと猫を飼いたいと思っていた。しかし、最悪な事にオレは猫アレルギー。猫が近くに居るだけで症状が出てしまう。父も母も以前、それぞれ猫を飼っていて、代々の猫達の自慢話を競い合う猫派人間だったからオレのアレルギーさえ無ければ当たり前の様に猫を飼っていたんだと思う。

この厄介なアレルギー、何とかならないものかと主治医に相談もしてみた。ところが、主治医も四匹の猫を飼う猫派人間。どんなにハードな勤務であっても猫は疲れを癒してくれるらしく、愛猫の写真を見せ猫自慢が始まる。時には猫派の看護師まで加わり、オレの悩みを解決する事も無く、猫自慢やりたい放題。オレには猫は無縁なんだと諦めかけていたある日、ふと立寄ったペットショップで一匹の子猫と出会った。

いつもなら少し抑え気味で見ている父が珍しく子猫をケースから出して貰って抱きながら、これは運命の出会いだと言い出し、オレのアレルギーも何とかなると半ば強引な判断で連れて帰る事になった。まさかこんな展開で猫を飼う事になるとはびっくりだ。勿論、暫くアレルギーとの戦いになったけれど、猫が家にやって来た運命の出会いに感謝すると共に、アレルギーも次第に治まっていった。

家に帰ると猫が居る。オレにとって夢の様な生活だ。夢が叶った幸せを噛みしめていたある日、またふと立寄ったペットショップで一匹の子猫と出会ってしまった。今度は母が運命の出会いだと言い、一匹も二匹も一緒だと連れて帰って来た。一匹の幸せから二匹の楽しさは最高だ。オレも猫自慢が止まらない猫派人間となり、二匹の猫達も穏やかに過ごしていた。

たまに、父の次は母、続いてオレ？と欲深い事を思う時もあったけれど、まあ、それはあり得ない事だと思っていた。

ところがまた一匹の子猫と出会ってしまう。さすがに三匹は無理だろう。先の猫達とうまくやっていけるかとの心配もある。でもたまたま可愛いい子猫にオレは針付けになる。すると父がオレにこの子

猫を育てろと言う。その頃、学校生活が乱れ気味だったオレに子猫を育てる事で少しでも落ちつくのでは?という思いがあったらしい。オレも育ててみたい。そんなお互いの思いの中、子猫がオレの部屋にやって来た。子猫はすぐに部屋から飛び出し、二匹の猫達の元へ行き、仲良し三兄弟猫となった。

三匹と暮らすうちに父は次男猫にお前と出会って最高に幸せだと言う。オレが来るのをずっと待っていてくれて有難うとまで言う。母は三男猫が大のお気に入りだ。次男猫の事はすっかり忘れている。弟は密かに四匹目の出合いを待っている。

運命の出会い、それは突然やって来る自分勝手な思い込みかもしれない。

もう次は無いと言いつつ、ペットショップを見ると誰かが必ず言い出す。まだ運命の出会いは無いけれど、いつ運命の出会いを作り出してもおかしくは無い。でも三匹の猫達を見ていると勝手な思い込みであったとしても運命の出会いに感謝。

## 佳作

### いつまでも大切にしたいもの

電子制御工学科 1年 ゆ う き

あなたには、「好きなモノ」ありますか。また、それは何ですか。野球、ゲーム、オムライスとか。

私には、「好きなモノ」があります。昔からずっと好きなモノが。それは、とても綺麗だけでも、時に悲しい気持ちにさせられる。泣いたと思ったら笑い、怒ったと思ったらまた泣いて。自己中で優柔不断だけど、本当は誰よりも優しい。そんないろんな表情をもつ空が好きです。私は、嫌な事があったとき、悲しい事、つらい事があったときは、真っ白な雲の浮かぶ青空を眺めていると、なんだか元気になってきます。不安や心配があるときには、青空を眺めるだけで不安や心配が勇気と自信に変わっていきます。そんな魔法使いみたいな、正直のヒーローみたいな空が大好きです。私は、なんでもない時でもただゆっくり空を眺めることが好きになっていきました。そんな綺麗な空がいつまでも続いてほしいです。

しかし、今では空に様々な危機が迫っています。いつも世界のどこかで空を傷つけている人々がいる

のです。

まず私の頭に浮かんだのは「戦争」です。なかなか身近に感じることは出来ませんが、今もどこかの国で人と人との傷つけあいが行われているのです。私の戦場のイメージは、鳴りひびく銃声、舞い上がる黒煙。と、やはり良いものではありません。戦争は、人を傷つけているだけではなく、自然環境をも傷つけてしまっています。私の好きな空を例に考えてみます。戦場から立ちのぼる黒煙でいっぱいになった空を想像してみてください。綺麗と言えるでしょうか。そんな濁った空しか知らない、戦場の人達はもったいないと思います。あんなに綺麗な景色を知らないなんて。私は知ってほしい。もっと多くの人々に。だから、戦争なんてやめて欲しい。人を傷つけて、自然を傷つけてまで手に入れたものに価値なんてない。だから、戦争をやめて、人々に綺麗な空を幸せを届けてほしいです。

しかし、問題はこれだけではありません。もっと私たちの身近にあるものがあります。それが、地球温暖化です。ずいぶん前から言われていて、様々な対策が行われていますが、まだまだ足りません。地球温暖化を意識している人、していない人がいると思います。しかし、それは間違っていると思います。この地球上で生活している限り、誰もが関わっているこの問題です。一人一人がそれぞれ責任を持ち、ゆっくりでもこの地球に恩返ししていくべきです。どんな小さなことでも、それぞれがやることによって、大きな力になっていきます。だから、美しい地球を守るために努力しないといけません。私も、大好きな綺麗な空を守るために、できることからやっていきます。

これからもずっと、大好きな空を見られますように。



## 佳作

### 私がいま若者として訴えたいこと

建築学科 1年 ハンサム

十六歳、高専生の若者の私が訴えたいことは、最近の若者がどんなことを悩み、どんな事に立ち止まっているかを理解してほしいということです。

確かに、大人から見て最近の若者はマナーが悪い、など、マイナスの部分が多いと思います。その中で私は「言いたい事を言わない、伝えない」という若者のマイナスの一部分について考えてみました。

何故この部分について考えたかという、私こそが「言いたい事を言わない、伝えない」若者だからです。しかしその言い方は正しくありません。私は「言いたい事を言えない、伝えられない」のです。

私は昔から泣き虫なところはありましたが、今日起きた事など母に話す事が好きでした。「あのね、」から始まり、夕食が終わるまで話し続けていました。しかしある日父を私の軽率な言葉で怒らせてしまい、それから私は言葉使いを少し気をつける様になりました。しかし父のいつもと違う様子にとまどい、私は父に話しかけなく、父も私に話しかけてこなくなり、それが一年続きました。その一年経った時に父がうつ病だった事を知りました。家庭内で色々あり、私は学校に行く気力さえ無くなる程落ち込み、友人曰くその時から私は無口になったそうです。

私が無口になってから友人の話には聞く専門になり、今日起きた事は母から質問されて答えるようになりました。

数年このように無口にしていた結果、現在何か喋ろうとしてもかむ、声かふるえる、思い出ししようと思っても文章が驚くほどまとまらない……困った事ばかりです。昔の方が日本語が上手だったかもしれません。

この様な事があり、私は「言いたい事を言えません。伝えられません」伝えたくてもかんだ事を笑われたり、「上手く喋ろ」と言われたりしてとても辛くなります。

私は怒られた時の怒鳴り声や悪口、陰口も苦手です。その言葉に殺されるんじゃないかという恐怖があるからです。言葉は人を殺せる事を私は知っています。

私は若者の中でも小心者で弱い方だと思います。

しかし私よりも弱くて学校に来れなくなったり引きこもってる若者もいます。喧嘩で殴り合いだとか苛立ちを外に吐き出せないこの時代、若者はストレスを溜め込んでいます。不登校者が増え続けている、今時の若者はだらしがない、などと言う前にこの時代の若者の気持ちを考えるべきだと思います。学校はめんどくさいから行かないという人もいますが、いじめ、家庭環境、勉強、周りの人間……たくさんの悩みによって若者のマイナス部分が出来てくるのではないのでしょうか。

この時代、暴力なんか起こしたら警察につかまり、ニュースに取り上げられ、コテンパンにされます。暴力が良いとは思いませんが、ささいな幼児の喧嘩でさえ親が止めてしまうのは少しどうかと思います。私が言いたい事は今時の若者のマイナス部分は今時の「ちゃんと、良く、完璧に」という大人の圧力が影響しているんじゃないかということです。若者にも悩みがあります。やろうとしてもできない事があります。これが、私がいま若者として訴えたいことです。

